

## 黒木賢一先生から学んだこと

古賀 恵里子

私が初めて黒木先生にお会いしたのは、専任教員採用の面接の席であった。穏やかさと鋭さが練り合わされたたたずまいで、候補者である私にいくつかの質問をされた。緊張しながら答える私の一言一言を丁寧に受け止めて応答された黒木先生からは、人との関係やコミュニケーションを大切にされる姿勢が伝わってきて、「面接者」というよりも「熟練心理療法家臨床家」と出会ったという感覚が残った。

2015年4月に着任した後、これまで長く務めた精神科医療の現場から大学という未知の現場で働く私を常に支え励まし、大学教員として働くうえで軸となるいくつかの考えを提示し続けて下さった。その中でも私の中に強く刻み込まれている先生の教えについて感謝を込めて書いてみたい。

一つは「志を高く持つ」ということである。先生は臨床心理士を目指す大学院生に「志を高くもった臨床心理士になれ」と繰り返し伝えておられた。心理職として生きていくということは、単に面接技法や心理査定ノウハウを身に付ければ終わるということではなく、一人の人の内面、人と人との関係、そして人と社会の間で起こる事象の意味を常に考え続ける姿勢をいかに維持していくかということだと私は理解した。

弱気になると現状維持に甘んじてしまいそうになる後輩教員である私にも折に触れこのメッセージを投げかけて下さっていた。教育はもちろん研究も大切であり、教育の質と研究は連動していることも強調されていた。ご自分の海外での生活のご経験から、海外で学ぶこと、更には自分の研究を海外で発信することの意義も重視されていた。そのような黒木先生の姿勢に背中を押して頂き、私自身も長期海外出張をする機会を得た。COVID-19による2度の延期を経てようやく2022年4月に渡英した。帰国後、海外で学んだことをようやくご報告できると思っていた矢先に訃報が届いた。健康状態は万全ではないもののお元気でいらっしゃると聞いていたので、にわかには信じられなかった。また、ご挨拶を先延ばしにしたことが悔やまれた。

黒木先生がよく口にされていたもう一つの教えは、臨床心理学を活かすのはクライアントとの面接室の中だけでないということであった。自分が仕事をする上で組織の中で体験する諸事象を見つめ理解し対処することにこの学びを活かすことの重要性であった。先生はご自分が仕事をする上で「おかしい」と思うことを決して曖昧にはせず、迷わずにそれを議論の場に持ち込まれた。カウンセラーの態度にとって大切な genuineness を体現され、かつ、心理療法の節目で求められる confrontation を回避されることはなかった。

更に、一つ一つの事象を部分的に見るのではなく全体として何が起きているのかを理

解し、「囟」として浮き上がっている問題のみでなく、その「地」に生じている無意識の力動を捉えようとする姿勢が黒木先生には常にあった。

黒木先生という「人」の中では、臨床の営みと日々の生活が乖離することなく統合されており、その安定感とスケールの大きさに、私たち教員や学生・大学院生はしっかり抱えられていた。

黒木先生、これまで有難うございました。そして、黒木先生の「存在」は今後も私たち一人一人の中から消え去ることはありません。